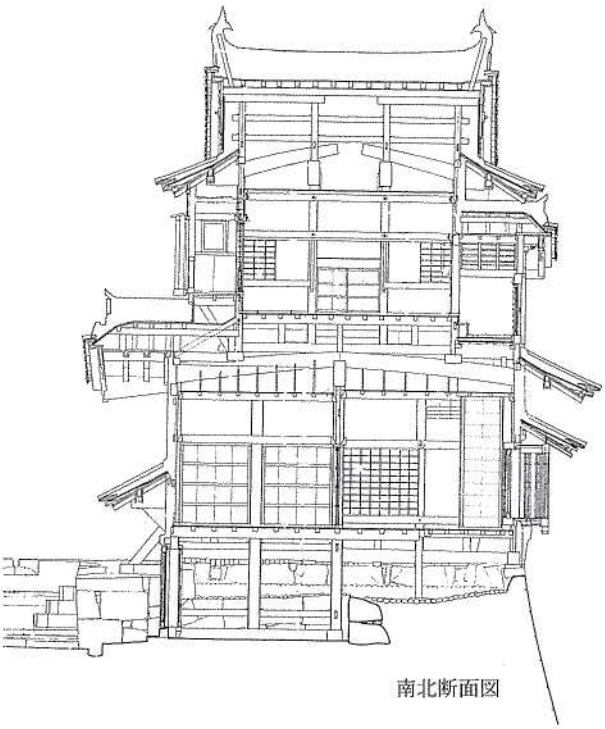
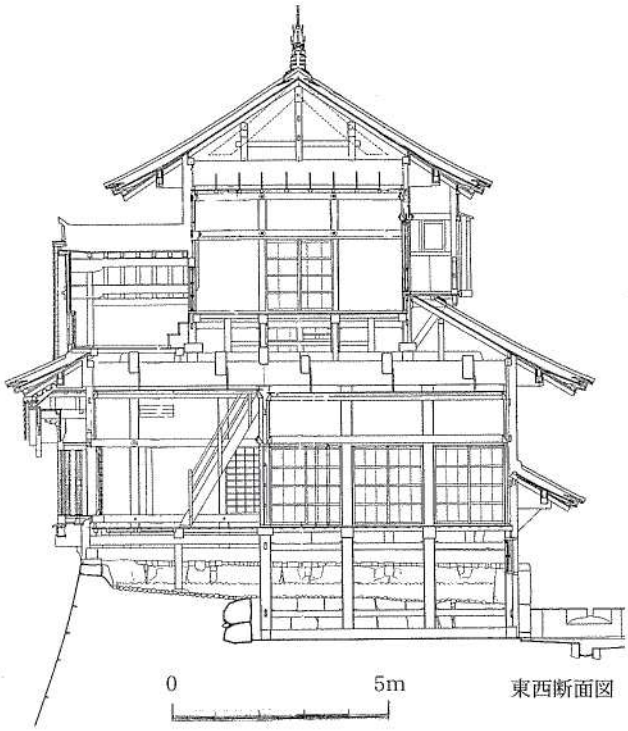
国指定重要文化財

岡山城月見櫓



南北断面図



東西断面図

0　5m

月見櫓は岡山城本丸跡に現存する唯一の櫓です。中の段の北西隅にあり、城の裏口を守備する役割を担っていました。元和元年（一六一五）から寛永九年（一六三二）まで岡山城主であった池田忠雄が、中の段の拡幅を行った時に建てたものです。岡山城内に三五棟あった櫓の中で最新の櫓で、最も優美な櫓でもありました。

櫓の平面は東西九・八メートル（柱間は五間）、南北七・九メートル（柱間は四間）で、高さは一三・八メートルあります。

三階建てですが、城外からは二階に見えます。櫓が建つ地盤が水平でなく、城外側が石垣によって一段高くなっているためです。最上部の屋根は入母屋造りです。下層の屋根は変化に富み、唐破風や千鳥破風が組み込まれています。鬼瓦は池田家の家紋であるアゲハ蝶がデザインされています。壁は総白壁の塗籠造りで、土壁の上に下見板を張ることで黒壁となった天守閣と好対照をなしています。

最大の特徴は、城外側は最新式の軍備を施しているのに対し、城内側には開放的で、櫓本来の機能を越えて内部の居住性を高めている事です。これは、櫓が建てられたのが元和の偃武の時期にあたり、軍事的な装備や技術が極度に発達しながらも、豊臣家が滅亡して戦乱の危機が急激に低下した時代相を反映したものです。

外向きの軍事設備を具体的にみると、最下の階（地階）は外からは存在が判りにくいうえ、堅牢な穴蔵式となっていて、上の一階の床板を外せば上の階と守備兵の通行が自由です。しかも、土間から一段高い城外側の石垣頂部には銃眼がほぼ一間おきに開けられています。一階は格子が入った出窓があって視界を確保し、下方に射撃を行うための施設である石落としも設けられています。また、二階西側の千鳥破風の裏は小部屋となっていて、外を監視したり鉄砲を撃つことができる仕掛けです。

いっぽう、城内側は、二階に手すりを配した縁側があり、普段は雨戸が入っていますが、広く開け放つ事ができます。櫓の名前の通り城主が風流に月見を楽しんだのかも知れません。また、一階と二階の内装は御殿建築に準じた部分が多く、畳が敷いてあった形跡があり、天井板も張られていますし、柱に釘隠しの装飾なども施し、障子も入っています。

櫓台の石垣は、瀬戸内海に浮かぶ犬島（岡山市東区犬島）産とみられる花崗岩の割石を積んだものです。特に隅角は、加工度の高い長方形石材の長辺を一段ごとに左右に振り分けた算木積みとなっていて、美しい曲線を描いて立ち上がります。また月見櫓の南と東に続く石垣頂部には、徳川期大坂城などと共通する半円形の刳りを入れた切石の銃眼が組み込まれています。

（岡山市教育委員会文化財課）

月見櫓のみどころ

城外側から見た月見櫓

二階建てに見え、開口部が少なく高度な軍事機能を備えている。割石積の高石垣の上に建つ美しい櫓。

城内側から見た月見櫓

2階には手すり付の縁側があり、開放的な造り。

一階と二階を繋ぐ急な階段

最上部に横引き戸があり、有事には天井の開口部が閉まる。

一階の内部

天井板や釘隠しなど御殿建築に準じた造りで、元は畳が敷いてあった。

一階の格子窓と石落とし

開口部は狭いが視界は広い堅固な出窓。石落としを開けると石垣が真下に見える。

二階の破風裏の部屋

格子窓の右の板壁には銃眼が組み込まれている。

二階の内部

内装は御殿建築に準じ、城内側に縁側が付き望楼のよう。